

## 2018年度大学入試センター試験 解説〈倫理〉

### 第1問 現代社会・青年期分野

問1  正解は⑦。

- a イが入る。経済のグローバル化が進んだことにより、各国の経済は相互依存を深めている。このため、たとえば2008年に起こったリーマン・ショックでは、たちまち震源地のアメリカから影響が全世界へと波及した。先進国と途上国の格差が縮小したとは言いがたいので、アは入らない。
- b エが入る。飢餓や貧困などの問題は戦争やテロの根源でもあるため、こうした問題を解決できるならば、世界平和に向かうものと考えられる。またこうした問題の解決は世界経済の発展にはつながるが、「新自由主義を推進」することにはならないため、ウは入らない。
- c オが入る。これまでの社会が前提してきたのが性別役割分担であるから、「社会全体の活性化」させるためには、この仕組みを「再評価」(カ)するのではなく「問い直す」べきである。

問2  正解は①。

- ① 誤文。ハヴィガーストは、「親の価値観を内面化すること」ではなく、逆に親から心理的に独立することを、青年期の課題としている。
- ② 正文。ハヴィガーストは、青年期の発達課題として、親からの心理的独立のほかに以下のようなものを挙げている。
- ・職業の選択
  - ・他者との洗練された人間関係
  - ・経済的な自立
  - ・結婚と家庭生活の準備
  - ・価値観や世界観の確立
- ③④ 正文。オルポートは、成熟した人格の特徴として、以下の様なものを挙げている。
- ・自己を客観視できること
  - ・自分なりの人生哲学をもつこと
  - ・ユーモアの感覚をもつこと
  - ・社会的領域への自己意識の拡大
  - ・情緒的に安定していること

問3  正解は⑦。

ア 「人道主義」の立場から労働者の環境改善を図ったのは、空想的社会主義のオーウェンである。オーウェンは経営者として実際の労働環境を改善し、アメリカで理想的な共同体建設を試みた。エンゲルスはマルクスとともに「科学的」見地から資本主義の転換を訴えた社会主義者である。

イ インドで「死を待つ人の家」を設立するなど、弱者の救済に献身したのは、カトリックの修道女マザー・テレサである。ガンディーはイギリスによる植民地支配に対して非暴力の抵抗運動を展開したインド独立の父である。

ウ アメリカにおける人種差別に対して公民権運動を展開したのは、キング牧師である。ラッセルは哲学者・数学者で、科学者の社会的責任を問うて核兵器の廃絶を目指す「ラッセル＝アインシュタイン宣言」を発表したことで知られる。

問4  正解は①。

ア 正文。欲求の階層秩序を説いたマズローによると、愛情と所属の欲求は5段階の欲求のうち3番目に位置するもので、これを達成することにより、4番目の承認の欲求が生じるとされる。

イ 正文。マズローの欲求理論によると、1～4番目の欲求はいずれも足りないものを埋め合わせることを求める欠乏欲求であり、これらがすべて満たされると、成長欲求とも言い換えられる自己実現の欲求が生じる。

問5  正解は③。

③ 高齢者介護を各家庭に委ねる(自助)のは限界に来ており、公的介護保険のような公的制度(公助)を充実させることは重要だが、政府の財源にも限りがあり、地域社会などの自発的な取り組み(共助)も必要だといわれる。

① 介護保険制度についての説明が誤っている。2000年に始まった介護保険制度は、高齢化や核家族化の進行によって、家族内での介護が困難になったことを背景に、「介護の社会化」を目指してつくられたものである。

② 育児・介護休業法は、育児と介護のために退職を余儀なくされる女性が多かったことを背景に、女性の社会進出を後押しするために制度化された。従業員が育児休業を申請した場合、事業者は、原則として子が1歳になるまでの期間の育児休業休暇を認めなければならない。この間の解雇は許されない。介護の場合には、最長で93日間の介護休業が保障される。

④ 少子化の進行は、介護における財源その他の担い手が減少していくことを意味するので、高齢者介護の充実という点で望ましくない。

問 6  正解は①。

- ① 人間だけがそれ自体の価値をもつという人間中心主義は西洋近代に顕著であったが、こうした見方が環境破壊などを引き起こしてきたといった反省から、動物などの自然物にも生存権を認めるべきだという**自然の生存権**の主張がある。
- ② **地球温暖化**は二酸化炭素などの温室効果ガス濃度の上昇が原因と考えられており、オゾン層破壊とは関係がない。なおフロンガスには、オゾン層を破壊する効果とともに温室効果もある。
- ③ **予防原則**とは、取り返しのつかない環境破壊を防ぐためには、因果関係の明らかでない場合でもあらかじめ規制措置をとるべきとの考え方。有限な環境で各自が利益追求を行うと全員の損害になるという現象は「共有地の悲劇」と呼ばれる。
- ④ **酸性雨**は、自動車や工場から排出される窒素酸化物や硫黄酸化物が原因である。

問 7  正解は②。

- ② 2015 年と 2050 年の総人口に占める高齢者の割合の差が大きいのは、1 位韓国 (22.0 ポイント)、2 位中国 (18.0 ポイント)、3 位ブラジル (15.0 ポイント) であり、高齢化の進行は地域に関係なく (東アジアと南米)、また現在の総人口にも関係なく (韓国は人口が最も少なく、中国は最も多い) 進行すると言える。
- ① 2015 年時点で総人口に占める高齢者の割合が高い上位 3 か国は、日本、イタリア、ドイツである。しかし 2050 年になると、韓国がドイツを抜き、1 位の日本は変わらないものの、2 位のイタリアと並ぶ。
- ③ 「それ以外の 4 か国」のうち、韓国ではおよそ 2.7 倍になるとみられるので、現在の総人口はかならずしも今後の高齢化の進行に影響しない。
- ④ 2050 年時点でもインドは 13.7% と、20% に満たない。

問 8  正解は③。

- ③ 資料文は、1999 年にノーベル平和賞を受賞した「国境なき医師団」の記念講演である。資料文では、国境なき医師団が行っているような人道支援が交戦国によって「戦争の道具」として利用されることが批判されており、そうしたことがないよう国際人道法という枠組みを各国が保証するよう求めている。
- ① 資料文によると、国境なき医師団が行なっているような人道主義的活動は、政治の失敗による非人間的な苦しみを和らげるためのものであって、政治的責任を引き受けるためのものではない。
- ② 資料文では、人道的活動には、国際人道法という枠組みが必要だとされている。
- ④ 資料文では、国家によって「紛争の犠牲者へのアクセスを禁じられたり、交戦国に

利用されたり」することが、国際人道法の「枠組みが正常に機能していない」こととして批判されている。

問 9  正解は④。

- ④ インド出身の経済学者アマーティア・センの思想が問われている。センは、ロールズが説いていたような単純な再分配を中心とする正義では不十分であるとして、福祉の目標は、各人の生き方の幅(潜在能力/ケイパビリティ)を改善することで、各人が達成できる状態や活動を広げることにあると論じた。
- ①③ センのいう潜在能力は「生き方の幅」を意味するのであって、「個人の才能」ではない。
- ② センが考える福祉の目標は、財や所得の豊かさではない。

問 10  正解は③。

- ③ 「動機が利己的じゃない行為なんてないと思う」などの発言から、A は一見利他的な行為も利己的な動機に基づくと考えている。
- ① 「利他的な動機は存在しない」は言い過ぎである。A の四番目の発言では、純粋な善意は利他的動機だという直前の B の発言を、「だとしても」と受けており、利他的な動機の存在を認めている。
- ② B は、見返りを求めない純粋な善意が重要だと述べているが、見返りを求める行為をすべて否定しているわけではない。また、結果的に人のためにならない行為を無意味としているわけでもない。
- ④ B は第三の発言において、「人助けしたいという純粋な善意」が「利他的動機」だと述べている。

## 第 2 問 源流思想分野

問 1  正解は②。

- ② イスラーム教における六信(六つの信仰対象)とは、神、預言者、聖典、天使、来世、天命である。聖典のなかで最も重要なのがクルアーンであり、これは単なる内面的な信仰のあり方だけでなく、ムスリム(イスラーム教徒)の生活をも規定している。
- ① 仏教はそれまでのバラモン教が前提してきた身分制度(カースト制)を否定した。
- ③ 古代ギリシアの詩人ホメロスの『イリアス』や『オデュッセイア』は、神々の意志が人間たちの世界に影響を与えるという神話的世界観(ミュトス)によって描かれており、後の自然哲学者たちが自然それ自体をロゴスによって捉えようとしたことと対比

される。

- ④ イザヤは旧約聖書に登場する預言者で、イスラエル王国の分裂後に成立したユダ王国で活躍したが、国情の不安定なユダ王国の指導者をたびたび批判した。

問2  正解は③。

- ③ イスラーム教における五行(五つの宗教的義務)は、信仰告白、礼拝、断食、喜捨、巡礼である。
- ① クルアーンは神の言葉とされ、アラビア語で著される。このため、他言語に訳すことはできず、翻訳はあくまで参考書という扱いである。ヘブライ語ではない。
- ② イスラーム教ではエルサレムも聖地とされるが、礼拝は開祖ムハンマドの生誕地でもあるメッカに向かって行われる。
- ④ イスラーム教はユダヤ教徒とキリスト教徒を同じ神に導かれた者という意味で「啓典の民」と呼んでおり、ユダヤ教およびキリスト教を兄弟宗教と位置づけている。自らを啓典の民と呼んだのではない。

問3  正解は④。

- ④ 正しい。資料文6行目以下には、聖人や君子を尊重すべき理由として、「彼らがその生まれつきの性を変えて……礼義をつくることができたから」とある。
- ①② 資料文には、優れた君子といえども、つまらない小人と同じく、礼義や作為が性にそなわっているわけではないと述べられている。
- ③ 資料文には、聖人たちが生まれつきの性を変えたと述べられている。

問4  正解は②。

- ② アリストテレスは、事物が質料(素材、ヒュレー)と形相(本質、エイドス)の複合体であり、本来の目的を実現するようにつくられているという目的論的な自然観をもっていた。
- ① 質料とは素材のことであり、目的をもたない。これに対して形相は事物の本質のことであり、たとえば鳥なら飛ぶこと、魚なら泳ぐことといったものを指し、個々の鳥や魚はその本質を実現するようにつくられているとされる。
- ③ 形相は「偶然的」ではなく必然的なあり方で実現される。
- ④ 潜在性をもつのは質料ではなく形相である。またその生成・発展は必然的に起こる。

問5  正解は④。

- ④ 大乘仏教は、慈悲の心に基づいて他者を救済する利他行を重んじ、その実践者であ

る菩薩を理想視する。

- ① 「霸道政治」を「徳治政治」とすれば正しい記述となる。霸道政治とは武力に基づく政治であり、孟子はこれを批判して王道政治を対置した。
- ② 「孔子」を「老子」とすれば正しい記述となる。老子は「大道廢れて仁義あり」と述べ、儒家が説く仁は次善のものにすぎないとして、仁すら不要になる「無為自然」なあり方を理想とした。
- ③ 「大乘仏教」を「上座部仏教」とすれば正しい記述となる。あくまで自己の悟りを第一とし、これを完成させた阿羅漢を理想視するのは上座部仏教である。④の解説も参照のこと。

問6 16 正解は①。

- ① ゴータマ・ブッダは、快楽を求める生き方だけでなく、極端な苦行主義をもしりぞける「中道」を説いた。その具体的修行法が「八正道」であり、そのうち「正業」とは殺生や盗みなどを働かず、正しい行いを行うことである。
- ②④ 「正業」の説明が、八正道の一つ「正見」（正しくものを見る）についての説明になっている。
- ③④ 六波羅蜜は中道や八正道を説いたゴータマ・ブッダより後の大乘仏教で確立された修行法である。

問7 17 正解は①。

- ① パウロは自身の体験から、人間がつねに悪へと流されてしまう存在であると考え、ユダヤ教において律法を遵守するという行いによる救済が説かれていたのに対し、人類の罪（＝原罪）を担ったイエス（贖罪）に対する信仰のみが救いへの道だと説いた。
- ② 律法の遵守ではなく、悔い改めと信仰こそが救いへの道であるとされる。
- ③ 人類は原罪を背負っていると考えているので、「罪のない本来の自己」という表現は正しくない。
- ④ パウロは、神によって義とされるのは善行によってではなく、ただ信仰のみによると考えている。

問8 18 正解は④。

- ア 誤文。ブッダは、ウパニシャッド哲学で想定されていたような不変の自己（我、アートマン）という概念を否定する（諸法無我）。
- イ 正文。プラトンによれば、人間の魂は理性・気概・欲望という三部分からなり、理性が他の部分を支配すべきだとされる。逆に欲望が他の部分を支配してしまうときに、

不正が起こる。

ウ 正文。朱子は理気二元論の立場に立ち、心のなかには善を志向する理がそなわっているとしつつも、肉体を支配する気の原理によって私欲へと流されてしまうと論じた。

問9 [19] 正解は②。

- ② 源流思想の多くは理想的な生き方をした人物を模範としてきたが、その背景には仏教やパウロにみられるように、現実の人間が欲望に囚われやすく弱いものだという認識があった。
- ① 「人間の欲望を根絶することはできない」との記述はみられない。
- ③ 源流思想の多くは、人間が欲望に囚われやすいと考えてきた。
- ④ 冒頭の段落では他者の生き方を模範とするよう言われることに反発する人も多いたろうとしているが、他者を模範とすることを「消極的な生き方」だとする思想は一つも紹介されていない。

## 第3問 日本思想分野

問1 [20] 正解は①。

- ① 正文。日本語の「カミ」とは、ヤハウェやアッラーなどの超越的存在ではなく、人知を超えた威力あるものの総称であった。
- ② 前半の記述は正しい(アマテラスの弟スサノヲは田畑を破壊するなどの狼藉を働いている)が、アマテラスは「造物主」でないし、裁きの神でもない。
- ③ 神が災厄をもたらす存在でもあるという記述は正しいが、そうした神の祟りに対しても、祭祀によって鎮めることができるとされた。
- ④ 神の住む高天原といえども人間の住む世界から隔絶していたわけではなく、ニギノミコトはアマテラスの命によって葦原中国(地上の世界)を統治するため派遣された(天孫降臨)。

問2 [21] 正解は④。

ア 誤文。鑑真は唐の高僧で、奈良時代の日本に戒律を伝えるために招聘された。真言律宗は鎌倉時代の叡尊が始めたもので、平安仏教の真言宗と律宗の融合を図った。なお「道路や橋の修造」という部分は奈良時代の行基に関する記述。

イ 正文。空海は真言宗の開祖であり、民衆に開かれた日本で初めての学校として綜芸種智院を開いた。

ウ 正文。時宗の開祖でもある一遍は、念仏札を配り歩き、また踊念仏などを行いながら、

信心のない者すら救われるとして各地で民衆への布教を行った。

問3 22 正解は②。

- ② 誤文。「宗派間での融和」「他宗に協力を呼びかけた」が誤り。日蓮は、法華経至上主義の立場から、法華経へと帰依しない宗派を邪宗として厳しく批判した。
- ① 正文。日蓮は鎌倉幕府の指導者にも教えを説こうと試み、現実を仏国土へと転換することを目指した。
- ③ 正文。日蓮は、釈迦が修行の末に悟りを開いた人物であるという教えは単なる方便であり、永遠の存在(久遠実成の仏)であると捉える法華経の教えを前提に、末法での救済を説いた。
- ④ 正文。日蓮は、法華経至上主義の立場から、『法華経』のなかに迫害を受けつつも法華経の教えを広めて衆生救済に励む菩薩(法華経の行者)が描かれていることに着目し、自身もそうした立場から精力的に布教し続けた。

問4 23 正解は④。

- a 本草学を研究し、『大和本草』『養生訓』などを著したのは貝原益軒である。本居宣長は賀茂真淵の弟子に当たる国学者。
- b 大阪の商人たちが出資して設立した学校・懐徳堂の思想家である富永仲基が入る。富永仲基は、儒学や仏教といった思想が歴史の産物であることを強調し(加上説)、特に大乘仏教が本来のブツダの教えと異質な後代の解釈であるとする大乘非仏説は有名。安藤昌益は神儒仏のいずれをも否定し、万人直耕の世を理想とした思想家。
- c 近世儒学者のなかで原典に直接向き合うことを強調した人々を古学派といい、なかでも古文辞学派を創始したのが荻生徂徠である。政治家としても活躍した新井白石は朱子学者と位置づけられる。

問5 24 正解は③。

- ③ 正文。石田梅岩は商人の職分がもつ社会的意義を強調したが、同時に各人がそれぞれの職分に満足するべきだという「知足」をも説き、身分制そのものは否定しなかった。
- ① 石田梅岩の説いた石門心学は、神道・儒教・仏教をいずれも受け入れるものであった。
- ② 石田梅岩の私塾は、はじめて女性にも門戸を開くものであった。
- ④ 石田梅岩は、商業の意義を説くとともに、商人の営利活動をも肯定した。

問6 25 正解は④。

- ④ 植木枝盛は土佐出身の民権思想家であり、その私擬憲法『東洋大日本国国憲按』では、

主権在民や抵抗権までが盛り込まれていた。

- ① 明六社の同人・西周ではなく、**新島襄**についての記述。
- ② 植木枝盛ではなく、**中江兆民**についての記述。
- ③ 西周ではなく、**福沢諭吉**についての記述。

問7 26 正解は③。

- ③ **三宅雪嶺**は雑誌『日本人』を発刊したジャーナリストで、明治政府が進めていた極端な欧化主義政策を批判し、日本の伝統を尊重する**国粹主義**を提唱した。
- ① 明治・大正期の日本の哲学界を指導した**井上哲次郎**についての記述。
- ② 大正・昭和に活躍し、『三太郎の日記』などを著した哲学者・**阿部次郎**についての記述。
- ④ 著書『日本改造法案大綱』によって二・二六事件の理論的指導者と目され、処刑された**北一輝**についての記述。

問8 27 正解は④。

- ④ 正文。資料文で内村は、自分たち伝道者が弱いことを認め、それとの対比でかえって神の強さが示されると述べている。
- ① 資料文で内村は、自分たち伝道者は、自分たちの欠点によって、かえって神の完全性を示すことができると述べている。
- ② 伝道者たちの弱さは「自ら克服」されたのではなく、弱さゆえに神によって導かれたと述べられている。
- ③ 完全な神に近づくことはできない。弱い存在であるにも関わらず神によって癒されたゆえに、伝道者たちは神の強さを確認させることができるとされている。

問9 28 正解は②。

- ② 先人たちがそれぞれ人々を教え導いた方法については多様な考え方がみられるが、その模索の背景には、「よりよき生や社会の実現を目指す強い信念」(最終段落)があったとされている。
- ① 近世には「教える者自身に徳を求める傾向が強まった」(第3段落)とあるが、それでも先人たちは実際に徳を身に付けて初めて教えを説いたのではなく、不徳の自覚を持っていた**石田梅岩**やその弟子・**手島堵庵**らが道を説き、**朋友**の獲得を目指したとされている。
- ③ 「自らの立場や役割を省みることなく」が正しくない。最終段落には、先人たちが「自己のあり方やその役割を模索」したとある。
- ④ 先人たちが「**神仏**や師に全面的に依拠しよう」としたという点が正しくない。たと

えば西村茂樹は特定の一人を師として信奉することを批判したとされている。

## 第4問 西洋近現代思想分野

問1 29 正解は②。

- ② 正文。法と道徳を統一することによって実現する客観的な自由のことを、ヘーゲルは人倫と呼んだ。
- ① 市民社会においては、人々が自由に自己利益を追求する結果、諸個人間の共同性が弱まってしまうため、「人倫の喪失態」と呼ばれる。人倫の完成は国家において実現する。
- ③ 国家においては内面的な道徳と客観的な法が一体となり、真の自由が実現する。
- ④ 家族にあっては、自然な愛情に基づく共同性が実現しているが、個人の独立性を欠いている。

問2 30 正解は④。

- ④ ロックは、人々の自然権を確実なものとするために国家が必要だとされるが、権力の濫用を防ぐためには、国王のもつ執行権および同盟権(外交権)と、議会のもつ立法権とのあいだで、権力分立が不可欠であると考えた。
- ① ルソーの社会契約説についての記述である。
- ② デューイの道具主義(プラグマティズム)についての記述である。
- ③ アダム・スミスの理論についての記述である。

問3 31 正解は⑤。

- a カントは、感覚による認識を重視するイギリス経験論と、理性による推論を重視する大陸合理論の統合を図ったといわれる。
- b 心の外にある対象を認識するに当たって最初に行われるのは、視覚や聴覚といった感覚によって素材を受容することである。
- c 認識の第二段階では、感性(感覚)による直観を通して受容された素材が、悟性によって、因果性などの概念(カテゴリー)を用いて整理され、秩序づけられる。

問4 32 正解は④。

- ア 誤文。コペルニクスではなく、イギリス経験論の祖であるベーコンについての記述となっている。
- イ 正文。ニュートンは、万有引力の法則を発見したことによって機械論的な自然観を確立した。

ウ 正文。20世紀アメリカの生物学者カーソンは、著書『沈黙の春』において、農薬などに含まれる化学物質 DDT が生態系を破壊しているとして警鐘を鳴らし、環境問題への先駆となった。

問5 33 正解は④。

- ④ ヨーヨーなどの一人で操作する道具については、飽きがこないようにするためには競争が不可欠であるとして、一人で遊ぶときであっても、潜在的な競争相手や観客が想定されると論じられている。
- ① まず資料文の冒頭に、遊びが個人的娯楽ではないことが述べられている。そして一人で操作する道具については、競争相手や観客がいないとすぐに飽きてしまうとされている。
- ② 一人で遊べる道具でも競争相手や観客が想定されるのは、そうしないと「上達」しないからではなく、飽きてしまうからである。
- ③ 資料文では技の遊びと競争の遊びという対比は行われていない。

問6 34 正解は①。

- ① 後期ウィトゲンシュタインの言語ゲーム論についての記述である。
- ② 日常的な発話(パロール)と構造としての言語(ラング)を対比しているのは、構造主義に影響を与えた言語学者ソシュールである。
- ③ ポスト構造主義に位置づけられる精神分析学者ラカンを念頭に置いた記述である。
- ④ ポスト構造主義の哲学者デリダを念頭に置いた記述である。

問7 35 正解は③。

- ③ 「ホモ・ファーベル」とは、道具を用いて目的意識的に自然に働きかける存在としての人間を指すベルクソンの概念で、「工作人」と訳される。
- ① 20世紀ドイツの哲学者カッシーラーが人間を定義した際に用いた概念「シンボルを扱う動物」(ホモ・シンボリクス)についての記述である。
- ② 18世紀スウェーデンの植物学者リンネが人間を学術的に定義するために生み出した概念「ホモ・サピエンス」についての記述である。
- ④ 20世紀ルーマニアの宗教学者エリアーデが人間を定義した概念「ホモ・レリギオーヌス」についての記述である。

問 8 36 正解は③。

- ③ 遊びが不要なものとなされてきたという点は、リード文2段落目で述べられている。自由や創造性の源泉としての見方は3段落目で、また社会的活動を理解するうえで重要という点は4段落目で述べられている。
- ① 遊びが子どもよりも大人にとって重要という指摘はどこにもない。
- ② 20世紀に入って社会の規律が強められたという記述はないし、遊びの重要性に着目した思想家は、シラーやニーチェのように19世紀以前にもいた。
- ④ ホイジンガが「実目的から離れた」遊びの意義に着目したとの指摘はあるが、20世紀に「人間の社会的活動」自体が「実目的から離れた」といった記述はない。また②と同様、20世紀になってから遊びの重要性が見直されたとの記述は誤っている。